

1. サイズ感あるフルフェイスデザインに、ダイナミックに立ち上がるスポークライン 2. サイドの肉抜きもデザイン性が高い 3. スポークのモデル名レタリングは、前作TCIIIのキャッチリとしたものから、スポーティな字体に変更された



ADVAN Racing TC-4

↑TC-4はTC IIIの後継モデル。モデルと番号の活字が変わったのは、デザインが飛躍を遂げてグレードアップしたことを示すため。名前もまたホイールデザインのひとつなのだ

ように、アドバンレーシングは、金型生産に並々ならぬこだわりを持つ。特にキャスト（鋳造）モデルのディテールを攻めたデザインは、このブランドならではの特徴だ。リムの深さからビッグキャリパーへの対応まで、ディスクのデザイン要素に取り込む細かさで、サイズバリエーションを用意しているのだ。

「金型でホイールを作る最大のメリットは、サイズバリエーションを細かく用意できることです。だから、友人受けするようなサイズも入れるようにしているんですけど、それは、決してマニア御用達を狙ってわけではないんです。むしろ、ユーザーさんのホイールセッティングの、ステップアップにつながるサイズだっ、ボクは考えているんですよ」

その例として分かりやすいのが、萩原サンが日常の足にしているというアバルト595コンベティイオーネだ。アドバンレーシングRGR-D2の7.5J×17インチを装着しているが、車高がほどよく下がり、リアホイールには僅かにキャンバーがつけられている。

7.5J×17インチには、インセット30と35の二種類が用意されていて、実はセンターディスクもそれぞれ専用デザインなのだ。装着しているインセット30は、スポークのコンケープを35の方より深くしてあり、より力強いルックスを際立たせている。車高を下げて僅かにキャンパーをつけて装着すると、もっともかっこよく見えるようにデザインしたのだ、と萩原サンはいう。

「自分としては、この世界にドップリと漬かった人間として、そういう



YOKOHAMA WHEEL ADVAN Racing

ブランドの伝統を受け継ぎながら、 ホイールとしてのバージョンアップを目指す

歴史あるヨコハマホイールの代表的ブランド、アドバンレーシングは、洗練されたスポーツホイールとして輸入車オーナーからも高く支持される。今もサーキットのイメージを色濃く残すこのブランドの魅力を、デザイナーでありコンセプトメーカーでもある、ヨコハマホイールの萩原サンにうかがった。

問●YFC TEL.03・3431・9981 yokohamawheel.jp/
写真●ウイズ・フォト 文●永田トモオ

金型製作ホイールのメリットを 最大限に引き出す

モデルラインアップからも分かる

年代からけん引してきた一人が萩原サン。当初はレーシングドライバースとして活躍しながら、アドバンレーシングのホイールデザインを担当し、現在は、ヨコハマホイール全体のデザインやコンセプトメイクのキーパーソンとなっている。

「今は、一年に二本くらい新しいホイールをデザインして、あとは既存のホイールの追加サイズを作ったりという流れですね。このTC-4は今年の1月のオートサロンで発表した新作で、TC IIIの後継モデルです。ホイールをデザインする時、トレンドはそれほど気にしていません。きちっとアドバンレーシングらしさを入れながら、ホイールとしてバージョンアップするようつもりでデザインしていますね」

TC-4は、スポークをリムエンドまで伸ばしたモダンなフルフェイスデザイン。スポークの立ち上りをダイナミックに湾曲させて、人気ホイールのアドバンレーシングGTに通じる、ダイナミックな5スポークに仕上げている。

ヨコハマホイールは自社生産施設を持たない。ホイールのデザイン・設計までを行い、製作はホイールメーカーにアウトソーシングしている。そうすれば、工場維持のために大量に売れるようなホイールを作る必要がなくなるから、デザインにこだわったホイールを必要だけ作るという、ヨコハマホイールの生産スタイルが成立するのだ。



ADVAN Racing RS II

× PORSCHE BOXSTER S (TYPE981)

装着ホイールのサイズはフロント8.5×20 (51) にリア10×20 (40)。タイヤはフロント245/35にリア295/30。手をかけてフロントバンパーをスパイダーのものに変更。本物のスパイダーと違いすぐにトップもかけられるし、楽しく走るといならGT3よりもコチラがいいとのこと



ADVAN Racing GT

for PORSCHE

× PORSCHE 911GT3 4.0 (TYPE991-2)

装着ホイールのサイズはフロント9.5×20 (45) にリア12.5×21 (44)。タイヤはフロント255/35にリア325/25。純正のリアが高いシルエット嫌ってリアを微妙に下げた、変則的なホイールとタイヤの組み合わせ。最近入手してあまり走っていないが、パワーがありすぎて楽しむのが大変とのこと



ADVAN Racing RG-D2

× ABARTH 595 COMPETIZIONE

装着ホイールのサイズはフロント、リアともに7.5×17 (30)。タイヤはフロントもリアも205/40。他のクルマ同様に車高調サスをJ組んでいるが、このクルマの場合は、リアにキャンバーをつけて、後方から見たとき僅かにハの字になるようセットしてある。日常の買い物はこのクルマ



YOKOHAMA WHEEL ADVAN Racing 常にユーザー目線であり続ける それは大切なこと



↑「ユーザー目線であること」が萩原サンポリシー。だからホイールも、見せて走って楽しいセッティングにこだわる。ガレージもクルマも見事だ



横浜ゴム デザインC.M.P
萩原 修三
↑アドバンレーシングの初期から開発に関わった萩原サンは、1993年に「スーパーアドバンレーシング」で初ヒットをとると、すかさず設計にCADを導入。現在の路線をスタートさせている。

人間が欲しいものを作っているつもりです。だから、常に自分がユーザー目線であり続けるために、自分でも色々なクルマを買って、乗り続けているんです」

ツライチ、シャコタン、キャンパーはホイール装着の基本

現在、萩原サンの所有している輸入車は、アバルト595に加え、ポルシェ991型911GT3、981型ポクスターSの3台。それぞれのクルマに、自分がベストと思うサイズのアドバンレーシングを装着している。

「今のユーザーさんって、気に入ったホイールを見つけたら、サイズを選んで着けてもらってそれで終わりって人が多いですよ。でも、いいデザインを選んで、ただ着けただけでは、まだ終わりじゃないんです。ツライチ、シャコタン、キャンパーは、カッコいいホイール装着の要素だとボクは思っています。そういうところで、ギリギリ不良というかって、ちょっとだけ不良なところを見せるって、カッコいいじゃないですか」

しっかり走れて、見てもキレイに収めるホイールが理想なのだとか萩原サン。注目している輸入車がかがたら、デザイン的に一番先を行っているからメルセデスだとのこと。それでは、と新作についてうかがってみた。

「もちろん、来年のオートサロンに出品するホイールも、もう作ってますよ。まだ情報はお知らせできませんけど(笑)」